

斜面都市長崎における市街地形成と墓地立地の関係に関する考察

長崎大学工学部 学生会員○遠藤 匠

長崎大学大学院工学研究科 正会員 石橋 知也

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

墓地は死者を埋葬する施設として必要不可欠な施設である。しかし、現代社会において、墓地や火葬場などの死に関わる施設は、迷惑施設と捉えられる傾向にある¹⁾。一般に墓地は、集落を見下ろす高台や山の中腹部など市街地宅地の周辺に立地するとの既往知見がある²⁾。しかし、都市周辺部の墓地とそれを取り巻く環境は、明治期以降の急速な市街地の拡大によって、墓地は人々の生活により近い場所に存在するようになった³⁾。

この研究では、墓地立地に着目しながら長崎における市街地形成過程を分析することで、斜面地での都市形成の特徴の一端を見出すことを目的とする。

1.2 研究の方法

墓地の立地と市街地を把握するため、1901年、1924年、1954年、1982年、1999年、2016年の国土地理院発行地形図を資料とした。始めに現在の墓地空間を2016年の地形図を用いて特定し、それを1901年まで遡った。墓地空間を把握した後、墓地立地と市街地形成の関係を墓地の立地している場所の標高や、明治以降長崎市における都市計画の中心となった復興土地区画整理事業をもとに考察する。

長崎市の中心市街地において、稲佐山・金比羅山・英彦山・唐八景で囲まれた範囲(図1)を調査範囲とする。本研究では一定規模の墓地空間を取り扱うものとする。また、市街地は、地図上に記載された住宅の地図記号から読み取れたところとする。

a~pの地区は国土地理院の定める墓地の地図記号の解説により区分した。墓地の広さが、75メートル×75メートル以上の特定地区界という破線で囲まれている範囲を一地区とする(図2)。

2. 墓地の種類

大きく分けて共葬墓地、寺院墓地、民間霊園(公営霊園)の3つの種類・運営形態がある。それぞれ管理する団体が異なり、共葬墓地は城・集落、寺院墓地は宗教法人である寺院、民間霊園は財団法人や宗教

法人が管理している。また、公営霊園は宗派を問わずに収蔵・埋葬される²⁾。この研究では、b,c,nが共葬墓地、d,e,h,i,jが寺院墓地、a,f,g,k,l,m,o,pが民間霊園に該当する。

3. 墓地の立地と市街地拡大の関係

図1より2016年時点の墓地の立地はa~pの16地区であることがわかった。それぞれの地区を1901年まで遡り、墓地の立地について、各地区を次のグループに分類した。

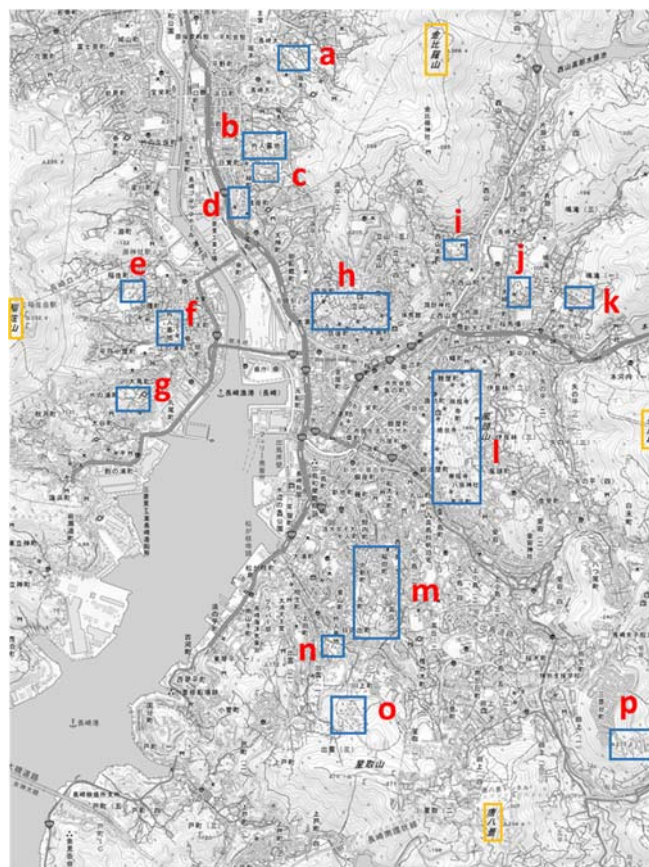


図1 調査対象エリア(長崎市街地)



図2 研究対象とした墓地

①1901 年からすでに市街地の外側に存在する地区 (j,k,l), ②市街地の拡大によって市街地に取り込まれた地区 (a,b,c,e,f,h,i,n), ③1901 年時点ですでに市街地の内側に存在する地区 (d), ④市街地の拡大によって墓地が分断されている地区 (m), ⑤ある年代から市街地外側に存在する地区 (g,o,p), 以上の 5 つである。

4. 総合的考察

墓地の立地と市街地拡大の関係の変化がわかる年代の地図を用いて、それぞれのグループの 1 地区を例として示した (表 1)。それぞれのグループの特徴は次のようである (①～⑤は 3 章と対応している)。

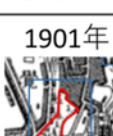
①墓地に対して市街地外側方向に標高 150m 以上の山があり、墓地は標高 40m から 150m に立地している。②1954 年から 1982 年の間に市街地に取り込まれた地区がほとんどである。b,h 地区は 1982 年時点では完全には取り込まれておらず、1999 年時点で取り込まれたことが確認できた。墓地は標高 40m から 100m に立地している。③現在の国道 202 号線の近くに立地している。墓地は標高 40m 未満に立地している。④1954 年時点で収縮し、1982 年時点で南北に分断されている。墓地は標高 40m から 150m に立地している。⑤1954 年までは墓地の表記が確認できず、1982 年から墓地の表記が確認できる。g 地区は標高約 60m, o,p 地区は標高 150m 以上に立地している。

さらに、復興土地区画整理事業との関係としては、復興土地区画整理事業の施工期間は 1946 年から 2016 年までである⁴⁾。d 地区を除く全ての地区が復興土地区画整理事業の施行範囲に含まれていないことが把握された。

5. おわりに

今後は墓地立地と地形および区画整理事業との関係をより詳細に分析する予定である。

表 1 墓地の立地と市街地拡大の関係のタイプ分類

タイプ分類	各グループの代表地区		
①1901年からすでに市街地の外側に存在する地区 j,k,l地区	1901年 	1954年 	2016年 
②-1市街地の拡大によって1954年と1984年の間に市街地に取り込まれた地区 a,c,e,f,i,n地区	1901年 	1954年 	1982年 
②-2市街地の拡大によって1982年と1999年の間に市街地に取り込まれた地区 b,h地区	1954年 	1984年 	1999年 
③1901年時点ですでに市街地の内側に存在する地区 d地区	1901年 	1924年 	2016年 
④市街地の拡大によって墓地が分断されている地区 m地区	1954年 	1982年 	1999年 
⑤ある年代から市街地外側に存在する地区 g,o,p地区	1901年 	1954年 	1982年 

参考文献

- 1) 高尾堅司・前田真子「住民の墓地建設に対する困惑と居住環境の維持対策ニーズ属性要因による違い」, コミュニティ心理学研究, 第 16 巻 1 号, pp.55-64, 2012
- 2) 八木澤壯一:「日本の近代墓地と風水」, 「都市計画」, 第 245 号, pp.41-44, 2003
- 3) 高橋俊也・渡辺菊真・布野修司:「京都における墓地の立地と市街地の変遷に関する考察」, 日本建築学会計画系論文集, 第 619 号, pp.133-139, 2007
- 4) 長崎市ホームページ,
<https://www.city.nagasaki.lg.jp/sumai/660000/663000/p005569.html>, 2020 年 1 月 8 日確認